

20161111 みやぎ地域復興ミーティング 事例共有報告①



●登壇者

ししおり
鹿折まちづくり協議会 事務局 丹澤 千草 氏

はじめまして、丹澤千草といいます。鹿折まちづくり協議会の事務局をしております。今日はコミュニティ再生と鹿折まちづくり協議会、これからまち協といいますが、その取組と課題と工夫について発表させていただきます。会場が結構立派なので、ちょっと緊張していますがよろしく願いします。

○鹿折地区の被災・復興状況

まず鹿折地区の場所ですが、気仙沼市の湾の奥の方に位置しております、ここが鹿折地区の一番被害が大きかった地区で市街地となっております。被災地区の被害状況ですけれども、火災とあと特徴的な共徳丸の震災遺構があったことで有名です。主な復興事業としましては、土地区画整理事業とかさ上げですがそれが一番大きな復興事業で、後は水産加工の集積地ですとか、防災集団移転団地が周辺にあります。今の復興状況、ハード面です

けども、かさ上げが順次終了し引き渡されて、そこから建物が建っているという段階になり、水産加工については結構工場が建っています。また災害公営住宅ですが、今年に入り、まだ全部は完成してないんですが7月末に一工区が完成して、入居が始まっており、現在135世帯ぐらいが入居しています。市街地がまっさらになり、人がバラバラになりました。周辺地域の仮設や、あるいは地区外に移転したのですが、災害公営住宅が建って、やっと戻り始めているような状況です。あと店舗もやっと今年に入って建ち始め、今のところ10店舗が営業を再開してます。自治会の状況ですが、被災地域にはまだ立ち上がっていません。周辺の自治会のみが活動しているような状況です。

○鹿折まちづくり協議会について

このまち協について説明しますと、震災後立ち上がりまして、基本はまちづくりについて話し合

い、話し合ったことを行政に伝え、色々な具体的な活動をして、情報収集と発信を行うというような形です。対象は結構広いのですが、被災地と非被災地、全部を対象としています。活動費は主に「みやぎ地域復興支援助成金」をいただいて活動しています。体制については、事務所があり、私ですけれども専任の事務局員が一人います。まち協の構成について、役員会というのがありまして、地区の自治会長さん達で構成されており、その下に構成員というものがあって、これは各自治会から1、2名の若手を募って形成されています。

活動ですが、まちづくりサロンを月1回開いたり、構成員会合というものを週一回、毎週火曜日夜7時から9時まで行っています。平均して15人くらい集まるんですけども、部会に分かれて、にぎわい部会、防災部会、暮らし部会というふうに部会に分かれて活動しています。あとはワークショップを開いて、公園ですとか街路樹について、中学生などと一緒に考えて、整備計画に反映してもらっています。話し合いの内容については、復興や色々な事業だけでなく、にぎわいとか、暮らし、防災、まちづくり全般に関わる事、今日の本題であるコミュニティづくりも活動の柱としています。話し合ったことは行政に伝えておりますが、例えば提案書ですとか、あるいは構成員会合とか色々な住民会合に市の職員に来てもらい、気軽にコミュニケーションを図っています。具体的な活動としては、今回お話しする盆踊りやまち歩き、金山ツアーというのも協力という形でやっています。それから復興状況の情報収集・発信について、フェイスブックを通じた広報や出張説明、今年に入り中学校の総合学習でまちづくり講話を授業の一環としてさせていただいております。

○鹿折復興盆踊り大会を軸とした

コミュニティ再生の取り組み

ここからは本題であるコミュニティ再生の取り組みということで、まち協として主に力を入れている「鹿折復興盆踊り大会」について報告します。

8月11日に実施しまして、約2,000人の方が来ました。今年に入ってやっと人が戻り始めて、店舗も建って営業が再開するという一つの節目ととらえて、地区として戻ってくる人たちを歓迎するという意味合いや、まちびらきというような意味合いを含めました。スローガンはみんなで考え、「おかえりなさい鹿折、いらっしやい鹿折」としました。予算は「みやぎ地域コミュニティ再生支援事業」を活用し、まち協単独ではなく、まち協が色々な関連団体にお声掛けして実行委員会をつくりました。

鹿折地区の住民団体について、個別の自治会が24地区あってそれが自治会長連絡協議会というもの構成しています。その他に地区の老人クラブや、スポーツ振興会、PTAなど色々な団体をまとめているのが鹿折地区振興協議会、地区振協と言いますが、地区振協が上位の地元の団体になり、まち協もその一員になっています。

盆踊りについても、まち協じゃなくて地区振協がやるべきなんじゃないかっていうことで、なかなか始まらなかったという経緯があり、最初にやろうと声があがったのが、去年の8月頃なんです。その翌年の4月、5月くらいまでなかなか動かなくて、地区振協に何度言ってもやろうという感じにはなりません。要望書を提出するまでになったんですが、やらないとも言われないので、色々な団体に声をかけキックオフミーティングをやり、そこでやりましょうという覚悟を決め、色々な準備に取り掛かりました。2、3ヶ月で準備を進めたという結構ギリギリのタイミングでした。

(スライドを差しながら)これが実行委員会で

すね。これが構成員会合ですけども、ほとんどの準備は週1回の構成員会合でやって、正味4回の実行委員だったのですが、実行委員会に諮って進め、ポスターは鹿折小学校の生徒さん達の作品を募集して、結果的に68枚のポスターの応募がありました。その中から採用し、2位と3位をうちわにしました。そういった形で色々なところを巻き込んで、やるようにしてきました。

当日はまちびらきと歓迎式がメインとなり、地区に戻ってくる人たちを地区として歓迎するという事で花束を渡したり、もちまき、虎舞、太鼓の披露、花火、盆踊り、大綱引きとくじ引きというようなプログラムでした。地元の水産加工企業さんに来てもらったり、これが地元の太鼓団体ですけども、虎舞ですね、これは結構有名な浪板虎舞という虎舞です。あと「LIGHT UP NIPPON」と連携して、花火を上げてもらったり、盆踊りを実施しました。「今時盆踊りか」という話もあったんですけども、意外と子供や若いお母さんも参加してくれて盛り上がりました。

その他は綱引きをやりました。綱引きというところ他の地区の人は何故という風に思われるのですが、震災前に毎年行われていたお祭りがあり、目玉の行事が綱引きだったんです。その綱が一時津波で流されたのですが、みんなで引き上げて、その綱を使ってまた行事を復活させたということで、地域にとってすごく意味のある行事でした。また、くじ引きもあるんですけども、くじ引きの景品についても地元の企業から集めたという流れもあり、かもめ祭りとか震災前もそういうやり方ですごく盛り上がっていたそうです。

振り返りをした際にも、「大盛況で一体感があった」、「来場者もすごく盛り上がった」、「みんなで力を合わせた」と口々に言っていましたね。また「数年ぶりに会った人がいた」とか、「鹿折に来て良かった」という風に来場者が嬉しそうに話していた

ようで、開催側としてはすごく一番嬉しい感想でした。色々な細かい反省点もいっぱいあったんですけども、来年はもっとうまくやるということで、ポジティブな振り返りをしました。

○地域住民の一体感の醸成

成果というか、コミュニティ形成におけるお祭りの意義ですが、一体感を醸成できたのではないかと思います。地域のかいことが大きな成果だったと言えます。地域の約20団体からなる実行委員会を開催、組織化したことなど、様々な協力を地域から得られました。地元企業だったり、小学校、自治会、高校生、体育団体、様々な組織から協力があり、地区が一つの方向に向かって、一丸となり鹿折を盛り上げようという一体感が、今後の住民活動の活性化につながり、元気な地域を形成するひとつの土台になるのだと、すごく実感しました。だからこそまちづくり協議会が関わる意味もあるのだと感じました。

ただし、実際は実行委員会に来るだけの人も多くて、今後そういったところは、どんどん活動が積み重なる上で、改善していくと思いますが、まち協が大半を進めたところがあります。その他の成果として、震災後バラバラになった人達が出会い、繋がった。災害公営住宅内の、新しいコミュニティの形成というよりは、新しく来た人達と地域を繋げるってというような意味合いですね。

あと、まちびらきというにぎわい創出という意味では、鹿折についてネガティブな印象を持っている人たちもいる中で、やはり被災地で色々な人が亡くなり、そういうところに戻ってくるにあたり、ポジティブな気持ちになってもらえるように考えました。

また大事なのが、伝統と地域の特色の継承として、大綱引きやくじ引きを復活させたということは、地域に対して、誇り、愛着心を育む、重要な

要素だったんじゃないかと思います。

○新しいことを始めるための

事務局からの後押し

難しかったことですが、新しい事を始めることに対する不安というのが、すごくあって、最初にやりたいと声が出て、みんなやりたい、やりたいって言いながら、なかなか始まらないんですね。なかなか覚悟が決まらない。やりたいけども大変だっていうのがあるんですね。盆踊りだけじゃなくて、その他のことでも良いアイデアとか想いがある人は結構多いんですけども、なかなか実行に移されないところあります。だから、従来のことをやればいってというような環境も少しあると思いますし、担い手不足、自治会の弱体化でいえば、なかなか後継者が育たない。先日自治会長をやっと引退できたっていう人に、本当にお疲れ様でしたという風に伝えたのですが、本当にすごい大変な思いをして、自治会をやってきたようでした。ですから不安や、思いや、熱量の微妙なところですか、閉塞感、そういうことでなかなかやるべきこと、新しいことが出来ないというところが、鹿折以外でも結構あると思うんです。その中で今回出来たっていうのを、一度まち協の中でも振り返りながら話をしたんですけども、その構成員会合という実働部隊がいたことが大きいんじゃないかと思いました。

○構成員会合発足の経緯と

盆踊り実施までのプロセス

構成員会合の成り立ちをお話しますと、2年前、自治会長さん達が中心で、参加者も少なく、どうにもならなかった時期があったんですが、東松島市の野蒜地区に視察に行きまして、色々と拝見させていただき、帰りのバスで振り返りをしたんですが、その中で事務局長が突如、すごく苦しい思

いを語り始めたんですね。すごい苦勞をしていて、とにかく参加してください、とにかく参加してくださいというすごく必死な訴えをその時に話していました。それを聞いた市議会議員の人が、これじゃいけないということで、人集めをして下さいました。そこで中心となるリーダー的な構成員の人達が集まり、まずどうしようかっていうことで、24 行政区の自治会長さん宛に依頼書を出しまして、各自治会から1人から3人の構成員を推薦してくれっていうことを依頼し、様々な交渉をお願いして、それで30人くらい集まりました。それから人の入れ替わりはあるんですけども、構成員会合が始まって、週一回、毎週仕事帰りに集まりました。大変でしたが、集まる中で雰囲気良くて、女性もいるんですけども話しやすく、意見が出やすい。意見も言ったことが受け入れてくれる、そういう雰囲気の間だったからこそ、継続出来たと思います。その中で行政と一緒に公園を考えたりだとか、そのような小さな実績をいくつも積み重ね、この会ならやれるんじゃないかと実感もあり、じゃあやろうっていう風になって、その盆踊りが始まりました。

まち協という、中立で自治会長達のバックアップというか自治会長達に支えられている組織が中心になっているということも、地域に信頼されるまち協が声をかけてみんな集まってくれたということもあるんじゃないかと思います。あとは事務局がいて、私は外部の人ですけど、しがらみにとらわれず、事務的に色々とコンタクトしたり、相談したり、作業量をいとわずできる、専任の人がいるってことは重要だと思いました。地区振興協議会の会長がやろうとは言わないけども、やるなとも言わないっていうことが、若い人達にとっては良かったということとその構成員の人たちは言ってました。その他のコミュニティ形成関連活動では、入居者に対する様々な交流会ですか、

他の支援団体、市とかをサポートする形でやります。

○まちづくり協議会のこれからの展望

最後に今後に向けてというところで、まち協としては主にはまちづくり活動ですね、それににぎわい、暮らし、防災。その中で暮らしについては、今度、交通弱者のアンケートを取る予定ですが、こういったテーマごとのまちづくりの活動をしていくことが中心になっていきます。コミュニティ形成について、盆踊り大会も今後毎年続けていく予定にしていますし、やはり地区のコミュニティ強化はまちづくりや復興の土台になるということを今回すごく感じたので、やり続けていきたいです。主体となるのは地区振協や、自治連、自治会長連絡協議会だったり、あるいは自治会、鹿折公民館だったりコミュニティ形成に関わる地元の組織になるので、そこをサポートするという、裏方的な役割を担うのが重要じゃないかという話もしています。

地区振協とかすごく重要なんですけど、専任の人もいないというところで、まち協は今のところ事務所もあり、専任の事務局員もいる。またコピー機とかそういった備品もあり、事務的なサポートをできるところがまち協なので、そういう役割を今のところ担っていると思います。これは参考までですが、自治会がすごく基本となると私は感じています。今日西みなと町の自治会長さんが来ています。年間の活動計画で色々な行事をやっていたり、ここの地区は結構飲み会が多くて、お花見会や、生ビール大会、芋煮会などすごく仲良い自治会で、だからこそみんなまとまり、活発なんです。この前も防災訓練がありまして、組ごとに指定の避難場所が決まっているんですけども、そういう活動も活発にやっています。「自治会とは」ということについて、議案書の表紙に書いてある

ことですが、「私たち町内に住んでいる人同士が、仲良く助け合って暮らしていこうとする組織で、町内に住む人たちの総意でつくられ活動し育てていくものです。お一人お一人が町内を考え積極的に参加することにより住みよい町内をつくっていきましょう」としています。今後もそういった地元単位の基本的なコミュニティが基本となっていくと思います。だけでも本当にすごく大変で、専任の人もいない中でみんな頑張っていると思います。コミュニティ形成への支援を考えた時に、新しいところだけでなく、地味だけど、目立たない活動をしていて、でもなんとか頑張っている既存のコミュニティという今ある財産に目を向けて、そこに対する目というか支援強化、サポートみたいなものを今後考えていかなきゃいけないのかなと思いました。

長くなりましたが、発表を終わります。どうもありがとうございました。(終)